

金沢城主前田家の医療と医家

池 田 仁 子

はじめに

筆者はこれまで、金沢などを中心とする加賀藩の生活文化や医療・医家について取り組んできた。特に近年では、医療や保養といった事柄について、金沢城内の金谷御殿での治療や藩主前田家における近世初期の考察を試みている⁽¹⁾。しかし、これらは限られた範囲での事例研究にすぎず、ことに2代利長らに関する病・治療医家などは不充分であることはいうまでもない。

そこで、本稿ではこれまで触れることができなかった未刊史料をも活用しながら、これまでの研究における一応の総括として、金沢城主で、加賀藩藩主前田家の病・治療・担当医家らの様相についてまとめることとしたい。なお、5代綱紀以降は、病の治療場所を中心に金沢城内の各御殿の利用に関わるものである。

はじめに、金沢市立玉川図書館郷土資料や同館加越能文庫所蔵の未刊史料より利長の病の様相について、検討を加えつつ病状など主要な内容に絞り込むなど概要にとどめ、紹介する。紙数の関係上それぞれの翻刻文は割愛することとした。続いて同様に未刊の写本「村井文書」（同館加越能文庫蔵、以下特記しない場合は同文庫蔵）に収録された利長の書状や城主前田家の初代利家正室で利長生母の芳春院の消息などより、芳春院や利長及び同人正室の玉泉院の病について概要を紹介する。次に、これらの成果に合わせ、既に考察した近世初期の当家の医療と医家について、誰が、如何なる病状で、治療に当った医家は誰かといった面から、表にまとめていく。引き続き5代綱紀からのちの14代慶寧の各代の様相について、同様に表示化し、医者の分類を試み、それぞれ考察する。地域社会をみる上で、こうした一つ一つの基礎的研究の積み重ねが肝要である。同時にこれらの事例がある意味で、一つの資料として、いわば、活用の便に供するものとしても重要と考える。

一 未刊史料にみる初期前田家の病と医家の概要

(1) 新出史料の検討

藩祖利家は天正9年（1581）織田信長より能登一国を拝領、同11年豊臣秀吉より北加賀2郡（石川・河北）を増封され、金沢城を居城とした。ここに加賀藩主としての前田家の支配が始まる。利家の嫡子利長は天正13年（1585）越中3郡（砺波・婦負・射水、のち新川郡を含め4郡）を秀吉より拝領、慶長2年（1597）越中守山城より富山城に移り、翌3年利家の隠居により前田家2代目として襲封、同5年関ヶ原合戦の戦功により南加賀2郡（能美・江沼）及び弟利政の旧領地能登をも徳川家康より拝領する。同10年利長は異母弟利常に3代目を継がせて隠居し、金沢城より富山城へ移る。14年3月富山城の火災により一旦は魚津城へ移り、新たに築城した高岡城に同年引き移る⁽²⁾。

利長は永禄5年（1562）に生まれ、慶長19年（1614）に没するが、この利長の病に関する文書は比較的数多く見受けられ、以下、利長の高岡での病・治療に関して、金沢市立玉川図書館郷土資料や同館加越能文庫所蔵の「微妙公等御書写」、「渡辺文書」など利常や利長自らの書状など未刊史料にみる様相についてまとめると次のようになる。

○伝承ではあるが、天正15年利長は（原文では18歳、26歳の誤りか）、「御疱瘡」に罹る（「新山田畔書」1巻）。

○慶長15年腫物が再発することは、周知の通りであるが⁽³⁾、それより以前の同11年～15年の間に

「御虫おちいり」と記され、虫氣（腹痛、蛔虫症カ）を患う（利光〈利常〉書状「微妙公等御書写」11月24日付、神尾図書・松平伯耆守宛）。

○慶長16年6月に利長（「肥前守所勞」）の治療のため盛方院及び慶祐法印が下向したことは「加藩国初遺文」などでも知られているが⁽⁴⁾、右原本で確認することができる（利光書状、慶長16年に比定される6月14日付、宛所欠、折紙、金沢市立玉川図書館郷土史料090－1514）。

○慶長15年～18年の間、利長の病状は「御快氣」「御平癒」或いは「御しゆきこゝち」などと記され、一進一退を繰り返していた（利常書状、6月16日付、神尾図書・駒井中務少輔宛、10月6日付、神尾図書宛、10月朔日付、神尾図書宛、「渡辺文書」2巻）。

○上記のように幕医盛方院（吉田淨慶）は慶長16年6月頃から17年11月頃までの間に何度か高岡に隠居している利長の治療に下向するが⁽⁵⁾、17年11月23日時点で、利常ら藩内の人々は、盛方院には利長の治療のため、もう少し高岡に逗留してほしいと願っていたが、それは「六ヶ敷」と盛方院本人は帰京を望んでいた（利常書状、11月23日付、神尾図書宛、「渡辺文書」2巻）。

○慶長15年～19年のうち、利長の腫物の治療に「一くわんとやらんぐたられ候由候」「此くすしの事申入」と見え、「一くわん」という薬師（京より下向カ）に治療を申し入れ、腫物の内薬のみ飲んでいるため「かやうによハリはて」と自ら述べている（利長書状、2月29日付、神尾図書宛、「神尾文書」1巻）。

なお、「小宮山文書」（石川県立歴史博物館蔵）正月30日（慶長15年～19年）長兵衛宛の利長書状には、「しゆもつちとおこり候て、たちいしゆふならす候」と記され⁽⁶⁾、利長が腫物再発のため立居が不自由である様子がわかる。

（2）写本「村井文書」にみる芳春院・利長・玉泉院の病と医家の概要

「村井文書」に収録された原文書の形態の多くは、おそらく折紙とみられるが、このうち射水市新湊博物館などに現存しているものもある⁽⁷⁾。なお、既刊史料の補遺として、「村井文書」4巻の11日付、村井出雲（長次）宛、芳春院消息によれば、利長の腫物につき母芳春院は、「とくたちせられ候ハ、」次第に良くなるなどと、毒絶ちの必要を説きつつ、養生すればやがて良くなるとも述べている⁽⁸⁾。以下、未刊の「村井文書」より芳春院・利長・玉泉院の病と医家について、人物別に各巻毎の記載順に整理すると次のようになる。

芳春院

（1巻）○9月9日付（慶長14年カ）、千世（利家・芳春院の娘）宛、利長書状に「こそ（慶長13年）かことく、はぐきよりち出申候やう」と記され、これはセンチュリー文化振興財団蔵の利長書状⁽⁹⁾の写とみられる。〔2巻〕○11日付（慶長15年カ）千世宛、芳春院消息に、前項と関連するが、芳春院の歯茎よりの大量出血は慶長13年とみられ⁽¹⁰⁾、その2年後「ねふとり」（根太、激痛を伴う化膿する出来物）が20～30ほど出来る。○10月20日（慶長15年～18年）千世宛、芳春院消息には、篠原織部長次や金沢城の外堀の築城で知られる篠原出羽一孝⁽¹¹⁾、青山豊後長次らが見えるが、「ろあんのくすりさうとう申候」と記され、幕医の半井驥庵（1544～1638、成信、瑞桂、通仙院）⁽¹²⁾の薬がよく効き、また、灸も据えていことがあることが認められている。○7月29日（利家八女福⁽¹³⁾が中川光忠に再嫁する慶長18年カ）芳春院消息に「はかことくうつきぬけ申候」と見え、歯茎が悉く疼き、抜けてしまったと記される。

（3巻）○4日（慶長18年～元和3年）「しゅんもし」（村井長次〈慶長18年没〉に嫁し同人没後春香院と称する利家と芳春院の娘、千世）宛の芳春院消息に、腫物を患い快方に向かいつつあるが、少し赤味（「あかミ」）がまだ残っていると伝える。○3日（慶長18年～19年）千世宛、芳春院消息に、腫物・歯痛を患い、目眩（「めかまい申候」）を起していると見える。○3日（慶長18年～19年）芳春院消息に、腫物も癒え（「し

ゆもつも昨日かいへ」、食欲も回復したと見える。

利長

(1巻) ○年月日欠(慶長15年~19年) 千世宛、利長書状に、飯はよく食べているが、肥えずに「やせ申候」と見え、意気消沈している様子が窺われる。○年月日欠(慶長15年~19年) 千世宛、利長書状に、腕の「いたミのとかになり申候」と記され、腕の痛みがおさまってきていることが記されている。

(2巻) ○11日付(慶長15年カ) 千世宛、芳春院消息では、利長は「こんとハひもしむしおこり」、腫物のほか虫気も併発したこと、芳春院は肝をつぶしており、毒絶しなければ「大やふれ」になるなどと記。○10月20日(慶長15年~18年) 千世宛芳春院消息では、腫物を患う「ひせんの事のミ」案じていると記。○21日(慶長15年~19年) 千世宛、芳春院消息にて、利長の「しゆもついへかね候」などと認める。○13日付(慶長15年~19年) 千世宛、芳春院消息に、利長の「しゆもつの事のミ」案じ暮らす芳春院は、奇特な生薬が必要か千世に尋ねている。○7月29日(慶長18年) 千世宛芳春院消息では、「しゆもつとくいへ候へかし」と利長の腫物が早く治るよう念じている。(3巻) ○3日付(慶長18年~19年) 春香院宛、芳春院消息によれば、高岡で利長の治療に当っていた藩医の内山覚伸・坂井寿庵⁽¹⁴⁾(「かくちう・しゆあん」)が金沢に帰ったとの報を芳春院が受けている。(4巻) ○6日付(慶長15年~18年) 村井出雲宛、芳春院消息では、利長の「むしけ」「しゆもつさいほつ」というように、虫気発症と腫物再発という二重の病を母芳春院は嘆く。○22日付(慶長15年~18年) 村井出雲宛、芳春院消息には、年老いていき、「少のとうりうニミまいたく」と見え、我が子利長の見舞いに行けない母としてのもどかしさを書き綴っている。○10日付(慶長15年~18年) 村井出雲宛、芳春院消息では、足などに広がる利長の腫物が「なをり候へかし」と念じている。○5日付(慶長15年4月カ) 村井出雲宛、芳春院消息には、利長の病の様子につき、腫物が同様に痛み、食欲がなく、將軍家より見舞いの使者として溝口伊豆(「ミそくちいつ」善勝、1万2000石)(「加藩国初遺文」8巻の秀忠判物写では、慶長15年4月朔日溝口伯耆(宣勝、善勝の兄、5万石)⁽¹⁵⁾とする)が遣わされたと記す。○16日付(慶長15年~18年) 村井出雲宛、芳春院消息では、芳春院は利長の腫物が「いへかね候て」などと述べ、治癒しないことを案じている。○15日(慶長15年~19年) 村井出雲宛、芳春院消息でも、利長の腫物が治らず、重病(「おもく」なっている)ゆえ心を痛める。(5巻) ○16日(慶長15年~18年) 村井出雲(慶長18年没)・妻千世(「かもし」)宛、芳春院消息では、芳春院は利長の腫物を案じ、「ひもしをそくさいになしたきまでにて候」など見え、母としての悲願の思いが窺われる。

玉泉院

(1巻) ○年月日欠(慶長19年~元和9年) 春香院宛、玉泉院の侍女とみられる宰相⁽¹⁶⁾の書状には、玉泉院様が「少つ、こゝろあしく御座候」などと見え、精神的に病んでいることがわかる。

二 初期前田家の病と治療医家

利長の腫物の治療に幕府より派遣された幕医の盛方院については、その系譜などもすでに紹介したが⁽¹⁷⁾、その周辺部に関しては、いまだ不充分であることはいうまでもない。例えば、今枝直方が編んだ「後撰芸葉」15巻に福島正則の書状の宛所として収録される⁽¹⁸⁾。内容は茶の湯に関する両者の交流が窺われるが、この盛方院は10代吉田淨慶か、11代の同淨珍か、12代の同淨元のいずれかであろう。今後盛方院に関する詳細な研究が期待される。

さて、本稿で判明したことを含め、これまでの成果をもとに不充分ながら初期前田家の病及び治療医者について、[表1]~[表4]にまとめたが、これら各表とも人物ごとに編年とした。

[表1] 前田利家・芳春院・利政の病と治療医家の事例

年月 〔西暦〕	人名 (年齢等)	居所	病状・治療・諸方対応等	主な治療医	
				医者名	所属・身分等
天正18年〔1590〕 7月	利政(13歳、 利家の子)	京都聚楽	眼病を患う		
文禄4年〔1595〕	同(18歳)	京都	疱瘡に罹る	「著名な医者衆」	(未詳)
				夕庵	(未詳)
慶長3年〔1598〕 4月～5月	利家 (61歳、藩祖)	(京カ→)上 野草津温泉 →金沢	湯治、針治療、30日程すぎても薄墨の如き 小水止まらず	以白(伊白)	出羽最上出身の鍼師
同4年〔1599〕 2月～閏3月	同(62歳)	大坂	喉より白き虫出る、虫の持病(蛔虫症)、2月 喉より虫2筋出る。閏3月3日逝去(この間徳 川よりしばしば見舞いを受け、返礼・挨拶等 書状の授受がなされる)		
(慶長5～13年) 〔1600～08〕	芳春院 (54～62歳)	江戸	病は一進一退を繰返す、喉痛となる		
慶長9年〔1604〕	同(58歳)	同	喉痛となる		
(慶長10～19年) 〔1605～14〕 10月	同(59～68歳)	同	前日より喉腫れ、胸も痛む	曲直瀬玄鑑 (今小路道三、玄朔の 子)	幕医
(慶長10～19年)	同(59～68歳)	同	投薬、針治療を受ける		
慶長11年〔1606〕 6月	同(60歳)	同	3日咳気が再発、6・7・8・10日の間曲直瀬玄 朔に付つきりで治療受ける。蛔虫症に細菌 性の下痢が加わったと診断、霍乱吐瀉、心 下虫痛む(寄生虫による腹痛、心痛)足冷 え、脈沈遲、大便激しく瀉し、口乾き、種々 投薬、一生に二度ないほど苦しむ、22日よ り起きているが、まだ身体は衰弱している	曲直瀬玄朔 (道三正盛の養嗣子、 道三、正紹、延命院、延 寿院)	(禁裏御用 医、信長に 拝謁、秀吉・ 秀次の侍医 →)幕医
(慶長13年カ) 〔1608カ〕	同(62歳カ)	同	恐ろしき病に冒される、気の疲れに血が 錯乱し、出血と診断、昼より晩まで耳盥を8 度替え、夜中まで流れる如く出血、デウス所 (キリスト教会)の奇特な薬でうがいし止 血、その後脈途切れ、身が石の如くになり、 身体から水分が流れるように出、脈が少々 ずつ戻る	「薬師衆」	(未詳)
				(デウス所の 薬使用する)	
★ (慶長14年カ) 〔1609カ〕9月9日	同(63歳カ)	同	芳春院が去年の如く歯茎より出血したこと を利長は妹千世に書状にて伝える		
(慶長15年10月カ) 〔1610カ〕	同(64歳カ)	同	湯治に行って来て一段と息災となり、鍼灸 治も沢山行う		
★ (慶長15年カ) 〔1610カ〕11日	同(同カ)	同	根太(化膿する出来物、激痛起きる)が20 ～30程出来、また、歯茎より多量に出血し ていると芳春院は娘千世に書状を書く		

★ (慶長15年～18年) 10月20日	同(64～67歳)	同	驢庵の薬はよく効き、また、灸を据えていると芳春院は千世に書き送る	半井驢庵	幕医
(慶長17～19年の間) 〔1612～14〕 9月	同(66～68歳 の間)	同	咳気がひどく散々な思いをする		
★ (慶長18年カ) 7月29日	同(67歳カ)	同	歯茎が悉く疼き、歯が抜けたことを芳春院は千世に書き送る		
★ (慶長18年～19年) 3日	同(67～68歳)	同	腫物・歯痛を患い、目まいも起きたと芳春院は春香院(娘千世)に書き送る		
★ (慶長18年～19年カ) 3日	同(67歳カ)	同	薬がよく効き、腫物も昨日より癒え、食欲も出て、回復傾向であることを伝え、また、高岡で利長の治療に当っていた内山覚仲・坂井寿庵も帰ったこと(金沢へ)を聞き、芳春院は春香院に返書を送る		
★ (慶長18年～元和3年) 〔1613～17〕 4日	同(同)	同	上方の薬がよく効き、腫物は一昨日より快方に向う、昨日は多く赤味があったが、今朝も赤味が多いものの、治りつつある、脈も回復してきたと芳春院は春香院(千世)に書き送る		

★印は本稿において、新たに確認した未刊の史料に基づくものであり、無印の分は、池田仁子「近世初期加賀藩主前田家の病と治療・医家」『研究紀要 金沢城研究』14号、平成28年による。

[表2] 前田利長・玉泉院の病と治療医家の事例

年月 〔西暦〕	人名 (年齢等)	居所	病状・治療・諸方対応等	主な治療医	
				医者名	所属・身分等
★ 天正15年〔1587〕	利長(18歳 <26歳の 誤カ>)	越中守山カ	疱瘡に罹る		
★ (慶長11年～15年) 〔1606～10〕 11月24日	同 (45～49歳)	越中富山、 魚津、高岡カ	利長は虫気を患っていたが、落着き、回復し、大慶であると、利常は神尾図書(之直)・松平伯耆守(康定)に返書を書く		
★ (慶長15年4月カ) 5日	同(49歳カ)	越中高岡	利長は腫物が同様に痛み、食欲もなく、將軍方より溝口伊豆(善勝)を使員として見舞いに遣わしたと、芳春院は春香院に書き送る(「加藩国初遺文」8巻の卯月朔日付、秀忠判物写では溝口伯耆(宣勝)と記)		
★ (慶長15年カ) 11日	同(同カ)	同	利長は虫気が起り、肝をつぶしている、また、腫物も再発し、毒絶ちしなければ大破れになると、芳春院は娘千世に書き送る		
慶長15年〔1610〕 ～16年2月	同 (49～50歳)	同	腫物が再発、徳川家康・秀忠等の間でしばしば見舞状の受け渡し有り(15年4月朔日秀忠は利長に宛て、所勞心許無く、重ねて溝口伯耆宣勝を遣わし、油断なく療養すべきと書状を送る)、本阿弥光悦より今枝重直宛に見舞状が届く		

★★☆ (慶長15年～18年)	同 (49～52歳)	同	利長における腫物等の快気につき、利常は慶びの返書を重臣(利長付カ)に送る(6月16日神尾図書・駒井中務少輔(守勝)宛、10月朔日神尾図書宛)。また、芳春院は娘千世に、利長の腫物につき大変案じていると書状を書く(10月20日)。さらに、同人は利長の腫物等病につき千世の夫村井長次に宛て、毒絶ちの必要を説き(11日☆)、虫気を患いつつ腫物が再発したことを案じ(6日)、見舞いが叶わないと嘆き(22日)、足の腫物が治るよう念じ(10日)、治癒しないことを案じる(16日)。また、千世夫婦に利長を息災にしてあげたいと悲願の思いを(16日)それぞれ伝える		
★★☆ (慶長15年～19年)	同 (49～53歳)	同	利長は自身の腫物につき、「一ぐわん」という薬師が下向する故、宿の手配をするよう、また、内薬を飲んでいるが、ひどく弱り果てていると神尾図書に書送る(2月29日)。また、利長は腫物のため立居が自由にならないと奥村長兵衛に伝えている(正月30日☆)。さらに、利長は物は食べているが、痩せて行く(年月日欠)、或いは腕の痛みが少しおさまってきた(年月日欠)などと妹千世に宛て書き送る。一方、芳春院は娘千世に宛て、利長の腫物が癒えかねるゆえ案じ(21日)、また、案じ暮らしつつ良く効く生薬が必要かなどと書送る(13日)	「一ぐわん」	(京都の医者カ)
(慶長15年～19年)	同 (49～53歳)	同	利長の腫物につき、家康より縫綱膏を下賜され、使用、ほか高岡の聖安寺、内山覚仲・藤田道閑は談合にて治療する	聖安寺 内山覚仲 藤田道閑	住職 藩医 藩医
慶長16年[1611] 5月	同(50歳)	同	腫物再発のため、行歩叶わず	盛方院 (吉田淨慶)	幕医
★ (慶長16年) 6月14日	同(同)	同	利長の治療のため盛方院・慶祐が下向し、治療したゆえ、利長は精気を得て回復した旨、利常は某へ書状を出す	盛方院 (吉田淨慶) 慶祐法印 (曾谷寿仙)	幕医 幕医
同6月～12月	同(同)	同	腫物煩い、盛方院・慶祐法印が幕府より派遣され、治療、処方薬の効き目が一時的に表われるが、平癒は難しく、行歩叶わず	盛方院 (吉田淨慶) 慶祐法印 (曾谷寿仙)	幕医 幕医
慶長17年[1612] 正月～閏10月	同(51歳)	同	豊臣秀頼は芳春院に宛て利長の治療に盛方院を遣わし、薬の効果ある由伝える。利長の腫物は痛みあり、依然一進一退を繰返す	盛方院 (吉田淨慶)	幕医
★ (慶長17年カ) 11月23日	同(同カ)	同	利長の治療のため、盛方院は越中・加賀へ下向していたところ、利常や重臣らは長逗留を要請するが、盛方院は帰京を希望、利常は心もとなく、尚口上にて申し含めると神尾之直に書状を書く	盛方院 (吉田淨慶)	幕医
慶長18年[1613] 4月	同(52歳)	同	利長は自身の病気は以ての外のことと述べ、使者をもって幕府に音物を贈る		

★ (慶長18年) 7月29日	同(同)	同	利長の腫物は疾く癒えるよう念じていると芳春院は千世に書き送る		
★ (慶長18年～19年) 3日	同 (52～53歳)	同	利長の治療に当っていた内山覚仲・坂井寿庵を金沢(カ)に帰したことにつき満足であることなど(一時的に回復したためカ)、芳春院は春香院(娘千世)に返書を書く	内山覚仲	藩医
				坂井寿庵	藩医
同19年〔1614〕 3月	同(53歳)	同	重臣本多政重は利長の腫物再発により、手足不自由、歩行困難ゆえ、利長の意中を幕府に伝えて欲しい旨覚書を認める		
慶長19年5月	同(53歳)	同	利長は「唐瘡」の煩いにて、春より金沢の医師、針立が様々に指集い治療するが、重体となり、逝去	金沢の医師	藩医
				針立	藩医
(慶長14年～19年) 〔1609～14〕	玉泉院 (36～41歳、利長正室)	越中高岡	利長とともに高岡在城のとき、気鬱に陥る		
★ (慶長19年～元和9年) 〔1614～23〕	同 (41～50歳)	金沢	玉泉院が心を病んでいると宰相(玉泉院の侍女)は春香院(利家・芳春院の娘、利長妹)に書状を書く		

★印は本稿における新出史料で確認したことによる。☆印は本稿の本文で紹介した史料に基づく。また、無印の分は、池田仁子「近世初期加賀藩主前田家の病と治療・医家」『研究紀要 金沢城研究』14号、平成28年による。

〔表3〕天徳院・前田利常の病と治療医家の事例

年月 〔西暦〕	人名 (年齢等)	居所	病状・治療・諸方対応等	主な治療医	
				医者名	所属・身分等
元和8年 〔1622〕7月	天徳院(利常正室、24歳)	金沢	夏姫出産後、肥立ち不良のため、逝去となる		
寛永16年 〔1639〕5月	利常(3代藩主、47歳)	江戸辰口邸カ	利常病臥につき、家光は使を遣し見舞う		
同閏11月	同(同)	江戸本郷邸カ	家光は老中を遣わし利常の所勞を見舞う		
同17年〔1640〕 正月～2月	同(48歳)	江戸本郷邸	利常所勞につき、家光は使を遣し、また、利常は菓子を拝領する		
同年7月～10月	同(同)	加賀小松	利常は国許にて所勞、幕府は寿昌院玄琢を派遣する。御瘧を発症し、本復した利常は御礼に加賀絹・能登鱈を進上する	寿昌院野間 玄琢	幕医
寛永18年 〔1641〕6月	同(49歳)	江戸本郷邸	利常所勞につき幕府上使が遣され、菓子を拝領する		
同21年〔1644〕 4月	同(52歳)	同	利常眼病につき、家光は御側用人を見舞いに遣わす		
万治元年〔1658〕 10月	同(66歳)	加賀小松	12日利常逝去(瀕死に際し、岡本平兵衛が鍼治、加藤正悦・藤田道仙が脈をとる、没後の17日要請により在京の幕医武田道安信重は加賀に赴く)	岡本平兵衛	(鍼師カ)
				加藤正悦	藩医
				藤田道仙	藩医

池田仁子「近世初期加賀藩主前田家の病と治療・医家」『研究紀要 金沢城研究』14号、平成28年による。

[表4] 前田光高・清泰院の病と治療医家の事例

年月 〔西暦〕	人名 〔年齢等〕	居所	病状・治療・諸方対応等	主な治療医	
				医者名	所属・身分等
寛永8年〔1631〕 5月	光高(17歳、寛永16年4代藩主)	江戸辰口邸	光高病となり、利常父子は幕府より御見舞いの御書を拝領する		
同15年〔1638〕 正月	同(24歳)	同	光高は疱瘡を患い、家光より銀品を拝領する		
同年8月	同	同	光高病につき、家光より鮎を拝領、幕府若年寄からも御肴を贈られる		
同18年〔1641〕 6月	同(27歳)	同	光高病につき、幕府は上使を遣す。御札に利常は登城する		
同21年〔1644〕 2月	同(30歳)	同	光高病により、家光は使者を送り、見舞う		
同年5月	同(同)	同	医者意安は光高重臣今枝民部に宛て、光高の病の拝診を了承する旨返書を遣す	啓迪軒吉田 意安	幕医
正保2年〔1645〕 4月	同(31歳)	同	光高頓死、(胸痛、一両度吐逆、その儘絶命、或いは正氣失い、気付薬、鍼治、灸治を行なう)	「医師中」	藩医ら
				寿昌院野間 玄琢	幕医
寛永15年〔1638〕 2月	清泰院(12歳、 光高正室)	同	清泰院は疱瘡に罹り、尾張等御三家は江戸城に参上し、老中に会い、見舞う。平癒し、家光より祝儀を拝領する		
正保2年〔1645〕 5月	同(19歳)	同	清泰院は産み月につき、幕医大膳亮三悦を藩邸に付け置く	大膳 亮三 悦(「道峻據」)	幕医
明暦2年〔1656〕 9月	同(30歳)	同	清泰院は五七日不予のところ他界する		

池田仁子「近世初期加賀藩主前田家の病と治療・医家」『研究紀要 金沢城研究』14号、平成28年による。

利長の病について、「北微遺文」(石川県立図書館森田文庫)、「村井文書」2巻、「神尾文書」、「沢存」より利長の書状等27点をすでに把握したが⁽¹⁹⁾、これらも含め、本稿においても表に示したように、現時点では確実な年次比定が困難なものも少なくない。今後詳細な検証によって、利長の病などを中心とした動向が明らかになるであろう。

次に光高の治療における医者意安については、「湯浅三輪両家伝書」(加越能文庫)にみられるが、この史料の影写本が東京大学史料編纂所「前田家所蔵文書」11巻に見えるゆえ、これを紹介すると次の如くである。なお、破損のため判読不明な箇所などは、主に()にて「湯浅三輪両家伝書」によりルビで補い、「湯浅三輪両家伝書」と異なる記載のある個所などは、同様にルビで〔 〕に示した。

すなわち「□刻預貴札候処、致修□□令延引候、然□□筑前様(光高)御脉之儀被仰下候、
御□意得候、必御見舞□□今自是御報可申上と存□□重而預御使候、猶□□意候、恐惶謹言、五月三日(寛永二十一年)啓迪軒□□今枝民部様」と記されている。

このように、医者意安は、刊本『加賀藩史料』が示すように「啓通院」でもなく、また、「湯浅三輪両家伝書」にいう「啓廻院」でもなく、「啓迪軒」と称したことが確実であり、姓は吉田とみられる。

なお、年次比定は右刊本が示す寛永21年（正保元年）に依った。

さらに、宛所の今枝民部（1587～1651、直恒）は光高の傳で、家老である。

ともあれ、[表1]～[表4]より問題点に触れながら小括しておこう。まず、慶長から寛永4年までの侍帳における医者についてみると、坂井寿庵・内山覚仲・山科長庵・沢田道可・同道才・飛鳥井理庵・道甫・高田慶庵・藤田道閑・同道仙・不破養軒・名倉不乱・津田宗意・覚与・小林又右衛門・小林幸庵・堀部休庵・大石玄哲・加藤正悦らが記載されている⁽²⁰⁾。彼らが、それぞれ初期の前田家の医療に具体的にどのように関わったか、今後新たな史料の発掘が期待される。なお、利常の治療の岡本平兵衛について、「寛永四年侍帳」「先代侍帳」「古組帳抜萃」「寛永元年侍帳」などには見えず、「諸士系譜」に記されている岡本左源太（350石、利常に仕え、元禄15年没）のゆかりの人物であろうか。

このように、近世初期では、前田家の医療において、文書や記録類などに藩医の名前が明確に記載されている場合はごく少数であり、藩医として召抱えられる人数も少なかったものとみられる。一方、徳川から幕医の派遣が顕著である。その背景には、徳川家が前田家に幕医を派遣することで、或る意味恩を売り、或いは幕医に前田家の動きを把握させる意図もあったのではなかろうか。すなわち、徳川と前田の間は緊張関係にあったものと解釈される。

また、新出史料などから、特に前田の人々は利長の病や芳春院に関する史料が多く残存していることがわかる。特に慶長15年の利長の腫物と虫気の悪いには、嗣子利常、母芳春院らの心配は尽きることなく、これを気遣う様子は多くの書状から確認できる。さらに、腫物のほか、新たに虫気も加わって患ったこと、腫物の治療に幕医の盛方院・慶祐法印の下向のほか、新たに「一くわん」という薬師の下向も認められた。

一方、芳春院についてみると、歯茎の腫れと大量出血・蛔虫症に加え、身体の腫物及び根太をも患つたことや、曲直瀬玄朔・同元鑑のほか、半井驥庵の薬が病によく効くと認識していたことから、芳春院は驥庵の薬をも使用していたことが推測される。

三 金沢城内における5代綱紀以降各時期の前田家の治療と医者

次に、金沢城内における5代綱紀からのち14代藩主になる慶寧に至る各時期の前田家の治療と医者について [表5] にまとめた。なお、この表では人物ごとではなく、総編年とした。

[表5] 5代綱紀から14代慶寧の代の前田家の治療と医者の事例

年月 〔西暦〕	城内の 治療 場所	患者 (年齢等)	症状・病名等	主な治療医		
				藩医、又は その子弟	御用医(所属等、藩領外からの派遣医含)	
					医者名	分類
貞享3年〔1686〕 11月～12月	二ノ丸	綱紀 (44歳、5代藩主)	鼻入口御出来、腹痞え、咽痛、風邪、頭痛	堀部養叔 端玄川 坂井泰順		
貞享3年12月	二ノ丸	恭姫 (21歳、綱紀養女)	発熱、頭痛、腹痞え	堀部養叔		
貞享4年〔1687〕 3月	二ノ丸	綱紀(45歳)	逆上せ、足腫氣、食細	堀部養叔		
貞享5年〔1688〕 6月	二ノ丸	同(46歳)	腹痞え、鳩尾痞え、背張り	堀部養叔		

貞享5年 6月～8月	金谷	豊姫(2歳、5代藩主綱紀の娘)	せわり・吐乳・腹虫痛 (前田佐渡邸より金谷へ引越による自家中毒か)	堀部養叔 端玄仙 坂井泰順 富山周甫 久保寿静	明石立庵 (町医、山科長安弟子、小児科)	b
					岸田如安(町医)	b
					津田寿軒(京町医)	c
					山科理安 (京町医、禁裏御用医)	c
元禄元年[1688] 9月	金谷	同(2歳)	御滞り、吐乳	端玄仙		
元禄2年[1689] 正・閏正・2月	二ノ丸	綱紀(47歳)	頭痛、鼻痛、歯茎痛、顔痛、鳩尾痞え、胸痛、腰部攣り、発熱、咳痰多出、痔痛	(堀部養叔)		
元禄2年3月	金谷	豊姫(3歳)ら綱紀の子女		端玄仙	山科理安	c
享保10年[1725] 4月	金谷	宗辰 (0歳、のち7代藩主)	出生	南保玄隆、久保寿斎、林白立、山科教安、南保玄仲、久保定能、松原寿永、森元育		
延享2年[1745] 5月～6月	二ノ丸	吉徳 (56歳、6代藩主)	時気当り、脾脹、浮腫、食欲不振、不眠→没	中村正白 佐々伯順 林玄潤 池田玄真 大高東元 南保元伯 小宮山了意(全柳) 久保寿安	原田玄覚 (町医、のち本多安房家中医)	b
					岩脇碩安 (横山山城守家中医)	a
					小林意安(町医)	b
					辻祐安(京町医)	c
					奥田宗安 (町医、宗信の弟)	b
					奥田宗信(町医)	b
寛延4年[1751] 3月	二ノ丸	重熙 (23歳、8代藩主)		佐々伯順		
宝暦3年[1753] 9月	二ノ丸	重靖 (19歳、9代藩主)	寒熱、麻疹→没	中村正白 八十嶋貞庵 中村全(俊)安 大庭探元		
宝暦3年10月	二ノ丸	重教(13歳、のち10代藩主)	麻疹	「御医師中」		
寛政7年[1795]	二ノ丸	治脩 (51歳、11代藩主)	過労による発熱、気分減退		荻野元凱 (典薬大允、のち尚蔵、金沢出身)	c

文化4年[1807] 2月、4月、11月	金谷	治脩(63歳、前藩主、隠居中)	痙攣(足腰、腹等の筋肉が引きつって痛む)、動悸		畠柳啓 (京都町医、禁裏御用医)	c
					畠柳泰 (京町医、柳啓の弟)	c
文化5年[1808] 12月～6年2月	金谷	同(64～65歳、前藩主)			宇田川玄真 (津山藩医、蘭学者)	d
					藤井方亭 (宇田川玄真の弟子)	d
文化6年[1809] 4月、5月、7月～	金谷	同 (65歳、前藩主)			畠柳泰 (京町医、柳啓の弟)	c
文化6年 9月～7年正月	金谷	同(65～66歳、前藩主)	→没		宇田川玄真 (津山藩医、蘭学者)	d
					藤井方亭 (宇田川玄真の弟子)	d
文化7年[1810] 正月	金谷	同 (66歳、前藩主)	→没	横井元秀 内藤宗純 大石慶庵	畠柳泰 (京町医、柳啓の弟)	c
					田中大玄(長甲斐家中医)	a
					津田隨分斎(横山家中医)	a
					三宅良雄 (本多勘解由家中医)	a
					白崎玄水 (町医、三ヶ所御用医)	b
文政4年[1821] 10月	二ノ丸	貞琳院 (60歳、12代藩主 斉広生母)	卒中風、痰ゼン (喘息)→没	江間篁斎 丸山了悦	田中大玄	a
					梁田養元(小松町医)	b
文政7年[1824] 6月～7月	竹沢	斉広 (43歳、前藩主、 隠居中)	麻疹、高熱、下痢、 吐瀉、痔疾、腹痛、 昏睡→没	江間篁斎 石黒玄丈 高木学純 丸山了悦 梁田耕雲(養元)	津田隨分斎(横山家中医)	a
					前田土佐守家中医	a
					前田彈蕃家中医	a
					竹中文輔(京町医)	c

天保5年〔1834〕 5月	金谷	延之助(14歳、前藩主斉広の子)	疱瘡→没	江間篁斎 石黒玄丈 丸山了悦 大庭探元 二木順孝 森快安	津田隨分斎 (横山山城守家中医)	a
					遠田元準 (前田土佐守家中医)	a
					片山君平 (奥村丹後家中医)	a
					山本文玄斎(町医)	b
					高嶋大膳 (本多勘解由家中医)	a
					森良斎 (横山山城守家中医)	a
天保12年〔1841〕 2月、3月、6月	二ノ丸	栄操院 (53歳、13代藩主 斉泰生母)	精神的疲労、水 瀉、下痢	森快安 大庭探元 丸山徹叟(了悦) 加藤邦安 長谷川学方 鈴木立白 梁田方叔 高嶋正顥 江間篁斎 藤井方亭	津田隨分斎 (横山山城守家中医)	a
					片山君平 (奥村丹後家中医)	a
					森良斎 (横山山城守家中医)	a
					三宅当一 (本多播磨守家中医)	a
					広野了玄(町医)	b
					山本安房介(禁裏医師)	c
天保12年〔1841〕 6月～8月	二ノ丸	基五郎(9歳)・ 豊之丞(7歳) (ともに13代藩主 斉泰の子)		藤井方亭 高嶋正顥	小林豊後守(禁裏医師)	c
天保13年〔1842〕 5月、6月	二ノ丸	斉泰 (32歳、13代藩主)	脚気、足張り、むく み、時気当り、発 熱、乾嘔	大庭探元 長谷川学方 江間篁斎 加藤邦安 横井白伯 小瀬貞安 鈴木立敬 鈴木立白 高嶋正顥 小川玄沢 中野隨庵 二木順孝 江間元林 津田昌溪 関玄迪 松田常安 黒川元良 加来元貞 久保三柳	片山君平 (奥村丹後家中医)	a
					森良斎 (横山山城守家中医)	a
					明石春作(長家家中医)	a
					横山政次郎家中医	a
					山本文玄斎(町医)	b
					鶴見啓輔(町医)	b
					小林豊後守(禁裏医師)	c

天保13年〔1842〕 6月～7月、 14年7月	金谷	真龍院 (66、67歳、前藩主 斉広正室)	発熱、瘡、高熱	長谷川学方、大庭 探元、森快安	小林豊後守(禁裏医師)	c
天保14年〔1843〕 2月	二ノ丸	基五郎(11歳)・ 豊之丞(9歳)	高熱、斑点発生、 疱瘡	森快安、大庭探元、 高嶋正穎、長谷川 学方、江間篁齋		
嘉永3年〔1850〕 11月	二ノ丸	栄操院 (62歳、13代藩主 斉泰の生母)	水腫、痔脱疾	加来元貞、堀昌 安、森快安、大庭 探元	山本文玄齋](町医)	b
					渡辺元隆 (横山図書家中医)	a
					洲崎白順(町医)	b
元治元年〔1864〕 8月～12月	金谷	慶寧(35歳) (次期14代藩主)	肝癧の症、拘攣顯 著、外威の邪気による 脾胃機能不全、胆汁逆行 の症、激しい下痢、 乾嘔、食欲不振、 胃中の灼熱による 瞳孔機能障害、内 障眼	江間三折、久保 三柳、小瀬貞安、 加来元貞、藤田玄 碩、不破文仲、堀 大菴、横井元中、 魚住恭菴、八十嶋 祥菴、桜井了元、 二木順孝、二木 東庵、長谷川学 方、池田玄昌、関 伴良、河合円齋、 河合善哉、片山 君平、片山亮雄、 高嶋正平、吉田淳 庵、黒川良安、高 峰元稟、鮑延良 節、吉益西洲、山 本文玄齋	吉田元琇 (溶姫〈景德院〉付、幕医)	c
					坂春庵 (溶姫〈景德院〉付 <small>カ</small> 、幕医 <small>カ</small>)	c
					渡辺元隆(横山藏人家中医)	a
					洲崎伯順(堅町の町医者)	b
					畠春齋(眼科医)	?
					順道(未詳)	?

池田仁子『近世金沢の医療と医家』岩田書院、平成27年（『研究紀要 金沢城研究』8～12号収載の分を再編成し新稿を追加）及び同「元治元年前田慶寧の退京・謹慎と金谷御殿における治療」『研究紀要 金沢城研究』13号、平成27年により作成。また、四角囲いの者は、本人もしくはその後裔が、のちに藩医に登用されたことを示す。

[表5]では、主な治療医として、藩医、又はその子弟のグループと、藩領外から派遣・招請された御用医のグループに分けた。このうち御用医の分類では、aは重臣お抱えの御家中医、bは金沢・小松の町医、cは京の町医・宫廷医家及び幕医、dは他藩の藩医、蘭学者及びその弟子とした。これは、あくまで事例であり、かつ延べ数であるが、その結果、aが23例、bが15例、cが16例、dが4例、不明が2例である。のことから、前田家の医療・治療に加わった医者のなかで、藩医以外の医家をみると、aの御家中医がもっとも多い。次に京都の町医・宫廷医家、幕医が多く、さらに、金沢・小松の町医が続く。重要なのは、dの宇田川玄真・藤井方亭といった蘭学者も招請されている点である。このことは、蘭学が当藩に受容されている一面と考える。これら町医や御家中医は、診療当時の身分・所属を示すものであるが、藩医以外の四角囲いの医家は、本人またはその後裔がのちに藩に登用されたことを示す。これも延べ人数でみると、御用医の総計60人中、22人がのちに藩に召し抱えられており、全体の4割近くに当る。つまり、前田家の診療に加わった藩医以外の医家は、のちに藩に召し抱えられる場合が少なくなかったことがわかる。

また、近世初期と比較し藩医や御家中医・町医といった医者も支配・所属面よりみると次第に多数

となり、医術・医学の進展により、より優れた医者を前田家が求め治療に当らせていることがわかる。

次に〔表5〕の治脩の病と治療医者の荻野元凱（1734～1806）について触れておこう。

「袖裏雜記」37巻（加越能文庫16・28-20）によれば「秋」に治脩を診療したという荻野による治脩の御容躰書の署名は「典薬大允 源元凱草」とある⁽²¹⁾。荻野は金沢出身の宮廷医家であるが、典薬大允に任せられるのは、寛政6年（1794）で、さらに尚薬になるのは同10年（1798）である。この間、「秋」に治脩が在国なのは、寛政7年（1795）と同9年に限定されることになる。しかし、何よりも決定的なのは、上記「袖裏雜記」の記述は、寛政8年2月であることを新たに発見した。ゆえに、〔表5〕では、「去秋」である治脩の治療の年月の欄は、寛政7年とした。

さらに、〔表5〕の慶寧の治療における医家について、典拠となった「拝診日記」には苗字が不明の場合もあった。しかし、その後の調査により、「大斎」（大安・大庵）と記されている人物につき、「公私心覚」14巻、安政3年6月15日条に「御医者 德田純作 堀大斎」と見えるゆえ、大斎の苗字は、堀であることが分かる。なお、同人は堀宗元（天保6年7月13日、宗叔と改称〈「諸士系譜」〉）の子とみられる。また、東庵（桃庵）の苗字は二木であることが「同」10巻、安政2年3月11日・同5年5月24日条にて判明する。さらに、善哉は「同」19巻、文久2年6月22日条に「円斎セかれ 河合善哉」と記されており、河合であることがわかった。また、吉田元秀（玄秀）については、「同」17巻、安政7年正月27日条に「御守殿（洛姫、景德院）附御医者 吉田玄秀老」と記されていることを確認した。因みに、吉田玄秀に関して、この後文久3年（1863）「姫君様御入国四品帳并御道中触等」によれば、藤井方朔・大津道順・吉田淳庵といった藩医とは異なり別項目に、つまり幕臣らが列挙されている「姫君様御供之御附衆」として「御ヒ御医師津軽良春院老」とともに「御医師 吉田玄秀老」と見えることから⁽²²⁾、幕医とみられ、かつ加賀藩の御用医者と解釈できる。一方、上記史料には坂春庵の名は見えず、先の「拝診日記」には、「坂春庵老」と記載され、常に「吉田玄秀老」と一緒に慶寧の拝診を行なっていることから、同様に、幕医で当藩の御用医者とみられる。

おわりに

本稿では金沢城主で加賀藩の藩主前田家における病と治療医家について、新出史料をも加味しながらみてきた。すなわち、若き利長が疱瘡に罹ったこと、隠居後腫物に加え、虫氣をも患つたこと、芳春院も腫物・根太を発症したことを新たに確認し、芳春院の2年続きの歯茎よりの出血につき考察を深めることができた。以下、一応の区切りとして、これらのことがらを含め、各代ごとに人名、発病及び治療場所、病状、担当した治療医家といった面より整理し、今後の課題について触れながら、近世全体を通しておきたい。

なお、初代利家から4代光高の代までの近世初期においては、京都・大坂・江戸・金沢、越中高岡、加賀小松などにおけるものであり、5代綱紀からのちの14代藩主慶寧までの各時期においては、金沢城内の各御殿における諸相、事例であり、城内の利用の有り方にも関わるものである。

初代利家に関して、草津温泉での湯治では、針立て以白の針治療を受け、のち蛔虫症等で没するが、保養のため大坂の屋敷内の庭や大坂城内山里丸を遊覧する⁽²³⁾。

利家と正室芳春院の子利政は京都にて疱瘡に罹り、夕庵の治療を受ける。

江戸での芳春院は、喉痛・蛔虫症、下痢・嘔吐、歯茎からの大量出血（壊血病カ）などが起り、幕医の曲直瀬玄朔・同元鑑の治療やキリスト教会の薬のほか、同様に幕医の半井驥庵の薬をも使用していたことが分かった。

2代利長は越中守山城において疱瘡に罹るが、隠居後高岡では腫物の再発に加え、虫氣をも患う。

腫物との闘いは足掛け5年に及び、腕や足にも広がり激しく痛み、立居も不自由となる。腫物の箇所を指で押すと膿が浮き上がり、また、物を食べても肥えるどころか痩せていくと、利長自身の書状で嘆く様子から、いかに苦しい鬱病生活を送っていたか、容易に推察できる。この間幕府からの見舞状や幕医の盛方院（吉田淨慶）及び慶祐法印（曾谷寿仙）も派遣され、また、「一くわん」という薬師も京都から下向する。平生は内山覚仲・藤田道閑・坂井寿庵ら藩医や高岡の聖安寺の住職の治療を受けるが、時には金沢から本道医や針立医の藩医が呼寄せられたものとみられる。

一方、利長の正室玉泉院は、利長の生存中は高岡にて、また、利長没後は金沢において、気鬱などに陥り心を病んでいることがわかった。

3代利常正室天徳院は産後の肥立ちが不良のため24歳にて逝去する。

次に、江戸辰口邸及び同本郷邸や隠居城加賀小松城における利常の病をみると、小松で瘧を発症し、幕医の野間玄琢の治療を受け、のち眼病を患う。江戸藩邸などでの病に対しては、しばしば幕府より見舞いを受ける。小松での危篤の際には、針立の岡本平兵衛や藩医の加藤正悦・藤田道閑などが手当てするも落命する。その訃報が届かないまま、在京の幕医武田道安信重⁽²⁴⁾は加賀へ下向している。

4代光高の病は、江戸藩邸におけるもので、父に先立ち逝去する。24歳の時疱瘡に罹り、のち何らかの発病には幕医の啓廻軒意安（吉田宗恪）の治療を受けるが、翌年頓死する。この時、胸痛の後吐逆し正氣を失い、幕医の野間寿昌院玄琢（成岑）の灸治を受けるが、絶命する。

光高の正室清泰院は光高の疱瘡の翌月同様に疱瘡を患う。のち、正保3年産月の際には幕医大膳亮三悦（道峻、好庵）の診療を受け、明暦2年数日間の鬱病の末他界する。

次に、5代綱紀からのちの14代慶寧までの各時期の病・治療医家について整理したい。

まず、金沢城二ノ丸御殿における綱紀の様相について、貞享・元禄期では風邪、出来物・腫氣、痞え、歯痛などが起こる。元来綱紀には頭痛・痰・痞えといった持病があったが、藩医の堀部養叔らの治療を受ける。乳児である綱紀の娘豊姫に対しては、金谷屋敷の新御殿において激しい吐乳などの自家中毒とみられる症状のため、藩医のほか、町医で小児科の明石立庵らが、また、京の町医津田寿軒や禁裏御用医の山科理庵らが下向し、それぞれ治療に当る。なお、金谷屋敷における前田家の居住利用は、豊姫が最初であった。

6代吉徳は二ノ丸御殿において脾膨、浮腫が起り、中村正白ら多数の藩医のほか、原田玄覚ら町医、岩脇碩安ら御家中医に加え、京の町医辻祐安も要請され、下向して治療に加わる。

金谷御殿にて、のちの7代宗辰の出生時には藩医の南保玄隆らが診療する。また、二ノ丸において8代重熙の病には藩医の佐々伯順が、9代重靖の寒熱・麻疹には藩医の中村正白らが、それぞれ治療に当る。さらに、のち10代藩主となる重教は麻疹に罹り、二ノ丸にて藩医らが治療する。

11代治脩については、藩主在職中の二ノ丸御殿での過労による発熱などに対しては、京都より下向する金沢出身の宮廷医家荻野元凱の治療を受ける。また、金谷御殿において隠居後の治脩は疝癰などの病を患い、宮廷御用医の畠柳啓、同人弟の京医畠柳泰や津山藩医で蘭学者の宇田川玄真、同人弟子藤井方亭、御家中医の田中大玄、三ヶ所御用医の白崎玄水ら藩医以外の多くの医家の治療をも受ける。

12代斉広の生母貞琳院の卒中風、喘息には、藩医の江間篁斎、御家中医田中大玄、小松の町医梁田養元らが二ノ丸御殿にて手当てを施すが、絶命する。

一方、斉広は竹沢御殿に隠居するが、麻疹・痔疾が重く、藩医江間篁斎、御家中医津田隨分斎らのほか、京の町医竹中文輔も招請され治療するものの逝去する。さらに、金谷御殿での斉広の子延之助の疱瘡の治療には、藩医江間篁斎らが、また、同御殿での斉広の正室真龍院の瘧の手当には藩医長谷川学方らのほか、宮廷医家小林豊後守も招請され治療に当る。

13代斉泰の生母栄操院は二ノ丸にて下痢や水腫・痔疾などを患うが、これらには、森快安ら多くの藩医のほか、片山君平ら御家中医や町医の広野了玄らが、また、招請された宮廷医家の山本安房介も治療を行なう。

一方、天保期二ノ丸における斉泰の子、基五郎・豊之丞に対し、藩医の高嶋正顥らのほか、禁裏医師の小林豊後守も診察に加わる。また、彼等の疱瘡には大庭探元らの藩医が治療する。

次に、二ノ丸御殿での斉泰の脚気などに対し、大庭探元など多数の藩医のほか、森良齋らの御家中医や町医の山本文玄齋らのほか、宮廷医家の小林豊後守も下向し手当てする。

幕末期禁裏警衛の任に当り退京することになり、のちに14代藩主になる元治元年慶寧の金谷御殿での病の治療と医家については、癱痺之症、思慮過多による精神衰弱、食欲不振、激しい下痢、痰血、胸腹痛、外威之邪気による脾胃不和、肝痺之症、内障眼、胆汁逆行之症といった重病に至り、上記のように医家の診断がくだされる。これに対し、江間三折ら27人の藩医及び慶寧の生母溶姫（景德院、家斉娘、斉泰正室）付の幕医吉田元琇・坂春庵のほか、御家中医の渡辺元隆、町医の洲崎伯順、眼科医の畠春齋、順道（詳細未詳）といった、総勢33人の医家らが一昼夜三交代で治療に携わった。

このように、診療時町医や御家中医の中には、前田家の治療に加わり、治脩以降幕末に向け、多数の治療医家がのちに藩医として本人または後裔が藩に登用される場合は、かなり多数の事例が認められた。ここには、前田家が医療に関し、より優れた技術・情報などを希求していたことが推測される。

また、当然ながら史料の残存の有無を考慮しなければならないが、近世初期では徳川は加賀前田家に対し、幕医を京都などから派遣し治療に当らせた。こうした傾向は、徳川政権の安泰や加賀藩の医療制度の確立などを背景に、5代綱紀以降金沢においては徳川から前田家の国元加賀への幕医派遣という問題は見受けられないものの、形を変えながら引き継がれることとなる。例えば6代吉徳の代などにみられるように、藩主・藩老らの協議の上で、医術の進んでいる京都等からの優秀な医者の選定が行われ、招請するといった場合も少なくなく、幕末ころまで続けられたことは注目される。

また、一方で藩医のみならず町医・御家中医の多数が、前田家の診療・治療に加わる傍ら、京・江戸などから優れた宮廷医家のほか京・江戸の町医を招請する傾向は初期より全時期に亘ってみられる点も見逃せない。

さらに、初期の利家・利長や幕末の慶寧の事例などにみると、為政者側の病気が政治的動向を左右することなどすでに明らかである⁽²⁵⁾。こうした病気・医療面での視座は重要であり、政治史と絡めて史実を明らかにしていくことも今後の課題である。また、治脩以降前田家の医療に関わった医家の中には、徐々に新しい蘭医学を学ぶ者も現われ、藩領内における蘭学の受容の一面が窺われる。こうした医家らはどのように医術を学んだのか、遊學の問題や医家同士の交流、或いは近代に向けての幕末維新期の医療政策の問題のほか、城下の医療や医家について、さらに他藩との比較検討も加え、今後の課題は山積みである。

[註]

- (1) 池田仁子（a）『金沢と加賀藩町場の生活文化』岩田書院、平成24年、(b)『近世金沢の医療と医家』岩田書院、平成27年（『研究紀要 金沢城研究』8～12号まで収載した分を再編成し、新稿を加えた）、(c)「近世金沢の医療—『伝統』の礎と社会史的意義を探る—」（地方史研究協議会編『『伝統』の礎—加賀・能登・金沢の地域史—』雄山閣、平成26年）、(d)「元治元年前田慶寧の退京・謹慎と金谷御殿における治療」（『研究紀要 金沢城研究』13号、平成27年）、(e)「近世初期加賀藩藩主前田家の病と治療・医家」（『同』14号、平成28年）、(f)「加賀藩における庭の利用と保養・領民」（長山直治氏追悼論集『加賀藩研究を切り拓く』桂書房、平成28年）など。

- (2) 利家・芳春院・利長・利政らの動向については、池田公一『槍の又左 前田利家—加賀百万石の胎動—』新人物往来社、平成 11 年、同（池田こういち）『前田利家』学習研究社、平成 13 年、同『加賀百万石をつくった名君 前田利長』新人物往来社、平成 22 年などを参照した。
- (3) 前田育徳会尊経閣文庫『加賀藩史料』清文堂出版、昭和 55 年復刻などにも部分的に収録。本文では、これを刊本『加賀藩史料』と称する（註（19）医者の意安についても、右書第 3 編に「湯浅家伝書」として収録）。
- (4) 池田仁子、前掲（1）（e）。
- (5) 池田仁子、前掲（1）（e）。
- (6) 「越前敦賀小宮山家文書 十村渡辺家文書目録」『石川県郷土資料館紀要』5 号、昭和 55 年、138～143 頁、及び石川県立歴史博物館『利家とまつをめぐる人々——大河ドラマ放映推進事業——』平成 13 年所収。宛所の長兵衛は「気多神社文書」などにも見られる奥村長兵衛であろう（『気多神社文書 第一』気多神社、昭和 52 年、69・70 頁、『同第二』昭和 55 年、138～143 頁）。また、この時期、長兵衛の文書については、大西泰正氏による「前田利長発給文書目録稿」（同編『前田利家・利長』戎光祥出版、平成 28 年）にも散見される。さらに、「村井文書」1 卷所収の利長書状、長兵衛宛、4 月 14 日付には、「此申しゆもつおこり申候由まいらせ候、」と見え、長兵衛が腫物を患ったことがわかる。
- (7) 『前田土佐守家資料館所蔵・射水市新湊博物館所蔵芳春院まつの書状図録』前田土佐守家資料館、平成 24 年、22 頁による。
- (8) 前掲（7）、原本は射水市新湊博物館蔵。なお、本稿全体を通じ、芳春院の消息については、前掲（7）の瀬戸薫氏による解説・解説を参照した。
- (9) 池田仁子、前掲（1）（e）。
- (10) 池田仁子、前掲（1）（e）。
- (11) 金沢における惣構堀の創建年次を検証したのに、木越隆三「金沢の惣構創建年次を再検証する」（『日本歴史』780 号、平成 25 年）がある。
- (12) 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編『新訂 寛政重修諸家譜』卷 11、続群書類從完成会、昭和 55 年、195 頁。京都府医師会『京都の医学史』思文閣出版、昭和 55 年、158・159 頁。
- (13) 前掲（7）『前田土佐守家資料館所蔵・射水市新湊博物館所蔵芳春院まつの書状図録』39 頁。
- (14) 池田仁子、前掲（1）（b）第 2 編第 1 章。
- (15) 溝口善勝・宣勝については、前掲（12）高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬編、卷 3、125・126・133・134 頁。池田仁子、前掲（1）（e）。
- (16) 宰相については、石野友康「玉泉院永姫に関する一史料と発給文書」（『研究紀要 金沢城研究』13 号、平成 27 年）がある。なお、加賀藩の藩政史料については、石野友康・大西泰正両氏に多くの御教示を賜った。
- (17) 盛方院については池田仁子、前掲（1）（e）。
- (18) 「後撰芸集」については大西泰正氏の御教示による。
- (19) 利長等 27 点の書状及び光高の診療における「湯浅三輪両家伝書」の医者意安については池田仁子、前掲（1）（e）。
- (20) 池田仁子、前掲（1）（b）、第 2 編第 1 章。
- (21) 前掲（3）11 編、866～868 頁に、ほぼ収録。但し、右書では、脱漏があり、また、返り点が省略されている。さらに「去秋」とは寛政 6 年に比定しているが、これは寛政 7 年の誤りであることを今回新たに確認した。同様に、池田、前掲（1）（b）85～86 頁で、安永 4 年以降寛政 5 年の間と推定したが、少なくとも上記御容跡書に記された荻野による治脩の治療年は寛政 7 年であることが分かった。したがって、これも訂正しておきたい。
- (22) 溶姫の加賀下向については、石野友康「溶姫の加賀下向と金沢城」『研究紀要 金沢城研究』12 号、平成 26 年。
- (23) 池田仁子、前掲（1）（f）。
- (24) 武田道安に関する史料としては、木越隆三「前田光高の学識を探る」（長山直治氏追悼論集『加賀藩研究を切り拓く』桂書房、平成 28 年）がある。
- (25) 池田仁子、前掲（1）（d）（e）。なお、利長における病中などの隠居政治については、見瀬和雄「前田利長の遺誠と慶長期の加賀藩政」（加賀藩ネットワーク編『加賀藩武家社会と学問・情報』岩田書院、平成 27 年）、萩原大輔「前田利長隠居政治の構造と展開」（『富山史壇』178 号、平成 27 年）などがある。